

平成 21年 5月 25日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006 - 2009

課題番号：18520569

研究課題名（和文）第2次世界大戦期における米軍「精密爆撃」の変容-原爆投下への道程-

研究課題名（英文）The History of Indiscriminate Bombing: The Road to the Atomic Bombing of Hiroshima and Nagasaki.

研究代表者

田中 利幸 (TANAKA TOSHIYUKI)

広島市立大学広島平和研究所 教授

研究者番号 10329336

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：無差別爆撃 戦略爆撃 大量虐殺 原爆投下 空爆理論

### 1. 研究計画の概要

本研究は、米陸軍航空軍の1930年代からの伝統的な戦略爆撃論が「精密爆撃論」であったにもかかわらず、実際の爆撃活動が第2次世界大戦中にいかなる過程を経て無差別爆撃の全面的な展開へと急速に変化していき、広島・長崎への原爆投下という大量無差別爆撃の極限にまで至ったのか、その歴史過程を分析し考察することを目的として行われる。具体的には、精密爆撃から無差別爆撃への移行の歴史過程の分析、ならびにそうした移行をもたらした軍事的要因、米陸軍航空軍指導部による正当化論、また敵国市民攻撃の軍事的正当化に対してアメリカの政治指導者たちと国民の反応したのに関しても、米国民の倫理観や人道意識との関連において考察する。

### 2. 研究の進捗状況

これまで米英両国ならびに国内において関係資料の調査と入手にあたった。

#### (1) 米国における資料調査

第2次大戦中に爆撃を担当した米陸軍第8

航空軍ならびに第20航空軍の内部において、米軍の公式戦略であった「精密爆撃」が現実には「無差別爆撃」へと移行していった経緯について、両航空軍が作成した攻撃目標選定と爆撃効果に関する報告書に焦点を当てて資料の調査と収集に当たった。さらに、戦時中に発行された大衆雑誌に掲載された、敵国爆撃に関する記事、写真、さらには「爆撃機」に関するボーイング社や戦時情報局が作成し掲載した広告を収集し、米国民が一般的に「敵国市民爆撃」に対してどのようなイメージを抱いていたのかを分析することに努めた。

#### (2) イギリスにおける資料調査

第2次世界大戦中のヨーロッパ戦線における連合軍側のドイツ空爆、とりわけイギリス空軍RAFの空爆戦略の実態と思想が、米国の爆撃軍に与えた戦略上ならびにモラル上の影響に関して、関連資料の収集に当たった。特に、昼間の「精密爆撃」に固執していた米陸軍航空軍の指導層が、実際には無差別の「地域爆撃」へと戦略を移行させていった過程の解明に焦点をあてて資料探索に当たっ

た。さらに、RAF による敵国ドイツへの空爆が当時のイギリスの新聞や大衆雑誌においてどのように報告されていたのか、逆に敵国ドイツによるイギリス各地への空爆はいかに報道され、その結果、どのような「敵国」に関する大衆イメージが形成されたのかについて、戦時中の新聞・雑誌類の調査と分析を試みた。

### (3) 国立国会図書館における調査

主として日中戦争期に、日本軍による中国諸都市への空爆が、当時の日本の大衆雑誌や新聞にどのように報告されていたのかについて、当時の雑誌、写真グラフ、新聞を利用して調査を行った。米英両国における同様の大衆雑誌における敵国空爆に関する報告との比較分析の目的でこの調査を行い、「敵国空爆」のイメージが、日本、アメリカ、イギリスではどのような共通点が見られ、どのような違いがあったかを分析するために必要な資料の調査収集を行った。

## 3. 現在までの達成度

### ② おおむね順調に進展している

海外ならびに国内両方における資料調査がほぼ期待していた通り、順調に進んだため。

## 4. 今後の研究の推進方策

本年度は研究の最終段階として、米軍の戦略爆撃思想の展開を、アジア太平洋戦争期に中国諸都市を継続的に爆撃した日本軍の戦略爆撃論との比較分析的な視角から検討する。とりわけ、1937から開始され、その後急速に拡大していった、錦州、南京、武漢、漢口、重慶などへの都市への空爆が、どのような戦略過程を経てエスカレートしていったのか、またこれらの爆撃を国際法違反である批難した米国に対して、日本軍はどのような考えを持ち、どのように対処

したのかについて、防衛庁防衛研究所戦史部図書館に所蔵されている関係資料を使いながら検討する。さらにまた、こうした中国への戦略爆撃を計画し指揮した日本軍将兵は、アジア太平洋戦争末期における、米軍による日本本土への飽和爆撃＝無差別爆撃に対しては、自軍が行った中国諸都市への爆撃との関連で、どのようにこれを受け止めていたのかについても、関連資料が存在するかどうかを調査する計画である。

また、これまで収集した資料の総合的分析を行いながら、最終報告書の作成に当たる。

## 5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

- ①「原爆投下の犯罪性と責任問題」『早稲田平和学研究』第2号(2009年4月)、27-44頁。  
査察無し

〔図書〕 (計 2 件)

- ①『空の戦争史』(講談社現代新書、2008年)、253pp.  
② *Bombing Civilians: A Twentieth-century History* (New York: The New Press, 2009) co-edited with Marilyn B. Young. 執筆担当頁:1 - 29p.